

Title	バルスバーイ期カイ口の食糧騒動
Sub Title	Food disturbances in Mamluk Cairo during the reign of Sultan Barsbāy
Author	長谷部, 史彦(Hasebe, Fumihiko)
Publisher	三田史学会
Publication year	2015
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.84, No.1/2/3/4 (2015. 4) ,p.265(265)- 285(285)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	文学部創設125年記念号(第1分冊) 論文 東洋史
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20150400-0265

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

バルスバーイ期カイロの食糧騒動

長谷部 史 彦

一 はじめに

シャーバーン二世期（一三六三―七七年）の後半からムアイヤド期（一四二一―二二年）にかけてマムルーク朝の首都カイロで頻発した食糧騒動や物価・救貧政策について論じた拙稿は、続くスルターン・バルスバーイ al-Malik al-Ashraf Barsbāy al-Zāhirī の治世（一四二二―一三八年）に関する検討を次なる課題と位置付けていた^①。その後、筆者は、マムルーク朝後期カイロにおける食糧騒動について政治文化史の視座から俯瞰し、オスマン朝期における同種の騒動との比較を試み、また、マムルーク朝の物価対策において注目される「神の価格」の含意について考察したが、上記課題への取り組みは果たせぬままであった。本稿は一九八八年の拙稿の続篇であり、

その目的は、これまで国際交易や都市の経済活動への積極的参入や専売制^⑤、さらにはキプロス遠征などの軍事・対外的な強硬姿勢によって特徴付けられ、「マムルーク朝スルターン権力の回春期（the Indian summer of the Mamluk sultanate）」などと評する向きもあるバルスバーイ期に照準を定め、アラビア語年代記などの同時代諸史料の記事に関する検討を通じて、王都カイロを舞台とした食糧騒動とマムルーク朝政権の対応についてその実態や性格を解明することにある^⑦。

本論に入る前に、バルスバーイ期のカイロにおける物価変動の特徴について言及しておきたい。本稿末尾の表はバルスバーイの治世における小麦、ソラ豆など主要食糧の価格変動についてまとめたものである^⑧。一四世紀末から一五世紀初頭にかけて顕著となった穀物価格の季節

変動の一般的傾向は、当該時期に入っても継続しており、投機性を強く帯びた穀物の売買などに起因した夏季のナイル増水期における急騰、春期の急落という変動パターンがやはり目立っている。そして、同時代の経世家マクリーズイーが問題視し、その年代記『諸王朝の知識の道程』(以下、『道程』と略記)の八三七年第一二月／一四三四年七月八月の記事において批判的に指摘したように、首都における穀価高騰には、買占め・退蔵行為や疑惑売買に加え、商業利潤の追求にひた走る都市支配層の一部によるデマの流布 (inṭāf) も作用していたのである。⁽¹⁰⁾

二 一四二五年一〇月の弾圧事件

一八二五年第四月／一四二二年三月にバルスバーイがスルターンとなり、その後しばらくの間、カイロでは穀物が安価で取引されていた。⁽¹¹⁾しかし、八二七年第四月／一四二四年三月になると穀価は上昇に転じ、一イルダツプあたり一四〇銅貨デイルハム (dirham min al-fulūs) であった小麦価格が二〇〇銅貨デイルハムになり、供給量が不足する事態となった。⁽¹²⁾同年第九月二一日 (コプト暦ミスラー月一三日)／一四二四年八月一七日、ナイルの水位は一六ズイラーウの「満水」に達したが、それに先

立って一時減水が観察されると首都の社会不安は高まり、買占めや売り惜しみの動きがみられた。⁽¹³⁾アイニーの年代記記事によれば、その三日前に水位の上昇が一時止まると、住民 (nās) が騒ぎを起こし (ḡajjat)、「小麦の船 (marākib al-qamḥ)」へと殺到した (tazāhamū) とい⁽¹⁴⁾う。住民は小麦を求めて「穀物河岸」へと参集し、荷揚げ前の小麦輸送船に押し寄せたのである。

結局この一四二四年夏の増水最高値は一七ズイラーウ一七イスバーであり、増水時の水位レヴェルとしては高くないとはいえ、通常であれば問題化する程ではなかった。しかし、大部分の村々 (biḥād) が冠水せず、エジプトの灌漑農業は不調であった。⁽¹⁵⁾マクリーズイーはその原因として、「時宜に合ったナイルの増水が不足したこと、それに、灌漑土手 (jusr) の整備についての関心の少なさ」を指摘している。これに続いて彼は、「というのは、灌漑土手の監督たち (kushshat) の熱心なことといえは、彼らがその整備に赴いた時に彼ら自身と彼らの配下のために地方の財 (māl al-hawāḥi) を集めることだったからである」と地方行政の現状について批判の論述を残している。⁽¹⁶⁾

かくして、地方灌漑行政の不備にも起因した冠水不足

の結果、冬作物の収穫期にあたる八二八年第七月／一四二五年五・六月にまずソラ豆価格が一イルダツプあたりで九〇銅貨デイルハムから一五〇へと急騰した。⁽¹⁹⁾その後、第八月／六・七月には、ソラ豆価格は二〇〇銅貨デイルハムに達した。⁽²⁰⁾マクリーズイーによれば、一イルダツプあたり一五〇であった小麦の価格も二〇〇銅貨デイルハムを超えるようになり、「穀物を見出すことが少なくなったが、人々はそれを求めたので、穀物の持ち主 (arbāb al-ghīā) たちと退蔵者たち (khaṣanat-hā) の心は貪欲になった」という。⁽²¹⁾

第九月に入ると河岸 (sāhī) や取引所 (irās) に穀物が多くみられるようになり、一時穀価は下降して、同月二二日 (ミスラー月一四日) ／一四二五年八月七日、ナイルは「満水」を迎えた。⁽²²⁾しかし、翌第一〇月／八・九月に入ると小麦以外の物価が高騰し、第一一月／九・一〇月には、小麦も再度一イルダツプあたり二〇〇銅貨デイルハムを超える高値を示した。そして、第一一月二六日／一〇月九日、銅貨の不足によって銅貨・銅貨デイルハム間の公定交換比が銅貨一ラトルあたり九から一二銅貨デイルハムへと改定され、パン価格も上昇し、パン一枚が一銅貨デイルハムとなった。この時には、パン屋

(khabbāz) でも銅貨が不足する状態であった。⁽²³⁾またアイニーによれば、同年第一一・一二月／九・一〇月には小麦が一イルダツプあたり三〇〇銅貨デイルハム近くに、ソラ豆も三〇〇、大麦が二八〇に達し、パン一ラトル (一枚) が一・五銅貨デイルハムとなり、シリアでも穀価の上昇が顕著であった。⁽²⁴⁾『道程』にも第一二月における小麦の価格上昇と不足が確認されるが、そこでは、支配層や民間の穀倉 (shuwan, makhāzin) に実は多量の小麦が存在しており、ナイルの増水も充分であることが言い添えられている。⁽²⁵⁾

このように穀価の高騰、銅貨流通量の不足、スークにおけるパン不足という市況を示していたカイロで、八二八年第一二月七日／一四二五年一〇月二〇日、抗議行動が起こった。この騒動について、イブン・ハジャルの年代記には以下のようにある。

第一二月七日、小売商たち (bāa) の状態が無視されていることと小麦が安価であるにもかかわらずパン価格の高騰が激しいことを理由として、ある集団 (ḡanāa) がムフタスイブのカーディー・バドル・アツ＝ディーン・アル＝アイニーに対して立ち上

がった (thara)。そして、彼らはスルターンに向かつて抗議したが、スルターンは彼らを助けることなく、彼らの中の一団を打ち、ある一団を脅し、約十人を投獄した。このため、諸店舗 (hawani) からパンが無くなり、彼らはパン焼き窯に殺到した。

その後、経済状態は回復し、大麦・小麦・ソラ豆の価格が上昇したにもかかわらず、パンは多くなったのである。それは、後述するように翌年初めのことであつた。⁽²⁶⁾

この記事からは、アイニの市場行政、とりわけパン価格の高騰をめぐるヒスバ行政に対する不満から、首都において集団が形成され、抗議行動が展開されたことが読み取れる。そして、彼らがスルターン・バルスバイーに向かつて異議を申し立てたが、スルターンはこれに処罰や投獄をもって臨み、斯かる措置が市場におけるパンの不足を招き、これがパン焼き竈におけるさらなる騒動を引き起こしたことが窺われよう。

この騒動の一連の展開については、マクリーズイーによるさらに詳細な年代記記述がある。

当該箇所を訳出すれば、以下のとおりである。

同月(第一二月)七日、*ḥamawāshī* 事件 (*ḥaitha shanā*) が起こった。それは以下のとおりである。市場 (*aswad*) ではパンを見出すことが少なくなつた。そして、カーヒラのムフタスイブであるアインタージョー (アイニ) *Badr al-Dīn Maḥmūd al-Ayntabī* が自宅から城塞に向かつて外出した時、民衆 (*amma*) が彼に対して叫んだ。さらに彼らは、アミールたちに対して救いを求め、ムフタスイブについての不平を訴えた (*shakaw*)。そこで、彼 (アイニ) はその道を迂回して、彼に対する投石 (*raḥn*) を怖れつつ登城し、スルターンに彼ら (抗議民衆) についての不平を訴えた。ところで、彼はスルターンと特別な関係にあり、スルターンのために、夜に諸王の歴史 (*tawārīkh al-mulūk*) を読み聞かせ、それをテュルク語 (*Turkiyya*) へと訳していたのであつた。そのため、スルターンは怒り、アミールたちの一団をズワイラ門へと派遣したのである。そして、彼らは人々を捕えようと通行人たちから細路 (*sikak*) の入口を奪った。そこで、ある非軍事奴隸 (*ba'd al-'abid*) があるアミールに対して投石し、傷つけた。このため、その非軍事奴隸は

掴まって打たれ、人々の大集団が捕えられた。そして、彼らはスルターンの御前に引き出された。スルターンは彼らに対する胴体切断刑 (*basma*) を命じ、彼らをカイロ総督 (*waiz*) に引き渡した。そこで総督は彼らを打つと、鼻や耳を削ぎ、土曜日の夜、彼らを投獄した。翌日、彼らはスルターンの前に引き出された。そこで、スルターンは彼らを釈放した。彼ら赦された男の数は二人であり、シャリーフからタージルまでがいた。そのために「人々の」心は見る影もなく変わってしまった、祈願 (*du'a*) やその他で「人々の」舌は絶叫したのである。

以上が『道程』の伝える事件の顛末である。その要点を列挙すれば以下のとおりである。

- (1) 抗議行動の主体は「民衆 (アーンマ)」であり、イブン・ハジャルの記述にも示されていたように、この騒動の主要な争点はパンの供給問題であった。
- (2) 民衆は市内でカーヒラのムフタスイブであったアイニーに対して抗議の言葉を浴びせ、アミールたちにムフタスイブに関する不満を訴えた。アミールたちの対応については不明である。また、
- (3) 民衆の投石を怖れたアイニーは、迂回路を通じて登城し、抗議民衆に関する苦情をスルターンに訴えた。
- (4) アイニーの訴えを聞いたバルスバーイは怒りの感情を露わにし、アミールたちを市中心部へと派遣した。こうした王権による対応の背景には、アイニーが「諸王の歴史」を軍人支配層の言語であるテュルク語に翻訳して夜毎スルターンに読み聞かせるなど、王権との間に特別に親密な個人的交流を保持していた事実があったとする。
- (5) アミールたちが送り込まれたのはカーヒラの南門のズワイラ門付近であり、彼らはその界限の横丁に踏み込み、抗議行動の担い手たちを捕えようとした。
- (6) アミールたちによる犯人捜査に抗して、ある非軍事奴隸が投石を行ない、アミール一名が負傷し、当該奴隸のみならず多数の首都住民が捕縛された。
- (7) このようにして捕縛された人々に対して、スル

ターンは通常はマムルークの処刑方法として採用される胴体切斷の死刑を命じたが、首都の警察長官であるカイロ総督が実際に執行した刑は鼻削ぎや耳削ぎであった。

(8) 刑の執行後、投獄されていた住民はスルターンの判断で釈放され、マクリーズイーによればその数は二人であった。彼らはすべて男性であり、その中には大商人、そして預言者ムハンマドの血統保持者であるシャリーフも含まれていた。⁽²⁸⁾

(9) バルスバリー政権による上記の住民への処罰、その残虐な仕置きは住民側に大きな動揺を引き起こした。

ここでとりわけ注目すべきは、捕縛された住民たちの人的構成であろう。投獄された男たちの中には、一般に都市のアーヤーン(名士)ともみなし得るタージルやシャリーフから奴隷に至る、実に多様な首都の居住者たちが含まれていたのである。首都の物価高騰に直面した住民による抗議の動きに大商人や貴種の参加もあったことが明示されている点において、カイロの食糧騒動史上特筆に値する事例といえるだろう。ただし、囚われた二人の男たちのそれぞれがムフタスイブのアイニーに對

する抗議行動へ実際に参加していたのかという点については定かでない。彼らの中には、アミールたちによる犯人捜査に反抗的態度をとった者や反抗者に協力的姿勢をとった者などが含まれていた可能性もあるだろう。タージル及びシャリーフについていえば、界限の顔役的存在として住民意思を代弁するなどして捕縛されたのかもしれない。

簡潔な筆致で冷静に事実を伝えているイブン・ハジャールに対して、マクリーズイーがこの出来事を「忌まわしい事件」とし、ヒスバの不全状況を問題視する「消費者運動」へのスルターン権力の対応をめぐって、明らかに批判的な立場から詳述している点も注目される。歴史家マクリーズイーの「ペシミズム」については特に欧米の研究者が好んで指摘するところであるが、ここでの彼の論述姿勢は、当該事例に先立つカイロにおける食糧騒動の諸事例に鑑みれば決して意外なものではないように思われる。⁽²⁹⁾これに先立つ時期と比較すれば、このケースにおけるバルスバリーの対応がまさに異例であり、マムルーク朝スルターン権力の統治技法の「常道」からすれば、投石などの慣行的な抗議様式に基づき住民から不信任表明がなされたムフタスイブについては速やかにこれ

を解任し、代わりに別の人物を据えることがより適切な対処法であったといえよう。

本事例におけるスルターン・バルスバーイの斯様な対応には、マクリーズイーの指摘するように、スルターンがアイニーとの間に結んだ特別な人的絆が作用していたとみてよいだろう。⁽³⁰⁾ 八二九年十一月一日／一四二五年一月二三日、アイニーは同職を解任され、代わって十騎長アミールのイーナル・アツシシユマーニー *Inal al-Shishmani* が着任することになるが、同年第四月二七日／一四二六年三月八日、アイニーはエジプトのハナフィー派主席カーディー職という司法の最高位の一つに任命されている。⁽³¹⁾ シリア北方の境域地帯に出自をもつこの学者が、民衆運動の弾圧という「忌まわしい事件」の中心に位置していたにもかかわらず、あまり時を経ずにこのような栄達を実現しえたのは、何よりもバルスバーイとの強固な個人的結び付きによるものであったといえよう。⁽³²⁾

ところで、先に訳出したマクリーズイーの記述は、イブン・タグリー・ビルデイーの年代記にほぼそのまま引用されている。そこでは引用に続いて、次のような追記がみられる。

そして、以上が彼（マクリーズイー）の述べたとおりである。しかし、両者（マクリーズイーとアイニー）の間には、古くも新しくも嫌悪の感情が存在したため、彼（マクリーズイー）は前述のアインタービー（アイニー）に対する民衆（*‘amma*）の投石については沈黙し、そのことでアインタービーの上に忌まわしさ（*shanā’a*）を強めようと欲したのである。⁽³³⁾

つまり、イブン・タグリー・ビルデイーは、マクリーズイーの年代記記述について、民衆によるアイニーへの投石行為について明記しないのは結果的に住民への嚴罰を導いたアイニーの「忌まわしさ」を強調する意図があつてのことであり、個人的な嫌悪の感情によるという点において問題があると論評しているのである。⁽³⁴⁾ 確かにマクリーズイーの記述には「投石を怖れつつ」とあるのみであり、実際に投石行為があつたのかどうかについては明言されていない。この事件の際に少年であつた有力アミールの子イブン・タグリー・ビルデイーは、投石行為に関する情報を事件発生時、またはその後獲得し、自らの事実認識に基づいてマクリーズイーを批判したのも

と思われる。

しかし、ここで確認しておきたいのは、問題のアイニーがイブン・タグリー・ビルデীর師の一人であったといういまひとつの事実である³⁶⁾。さらなる検討が必要ではあるが、イブン・タグリー・ビルデীরマクリーズイーとアイニーの感情面の対立を指摘しつつ、アイニーの方に肩入れする内容の記述を付加したことについても、それが個人的関係に根差した情動の表現である可能性はあるのである。また、たとえイブン・タグリー・ビルデীর指摘どおりに投石行為があったとしても、民衆のこうした抗議作法がバルスバーイーに先立つスルターンたちによつて事実上容認されてきたという歴史的事実を看過すべきではないだろう³⁷⁾。民衆の動きとバルスバーイーの対応について詳しく述べたマクリーズイーの立場は、慣行的作法による抗議に対してスルターン権力が弾圧をもつて対処したことに驚き、不満を抱く首都住民の方へと寄り添う性質のものであった。事件当事者でありながら、自らの年代記においてこの事件に全く触れようともしないアイニーの記述態度と比べるならば、故郷の町に居住する民の生活世界への共感的視線を確保したマクリーズイーの叙述のもつ意義は明らかであろう。

三 その他の食糧騒動とバルスバーイ政権の対応

一四二五年一〇月に起きた上記の騒動から、一四三八年六月のバルスバーイの死去までの時期についてみれば、カイロで発生した食糧騒動の事例は限られている。以下、政権側の動きにも注意を払いつつ、年代記に確認される諸事例の概要を時系列的に整理し、検討を加えたい。

八二九年第二月／一四二五年一二月になると、再びカイロのスクでパンが、製粉所で小麦粉が不足し、同月半ばには小麦一イルダツプが三〇〇銅貨デイルハムを超え、食肉も不足する事態となった³⁸⁾。同月二九日／一四二六年一月一〇日、パンを求めて住民(*ras*)がパン焼き窯(*atfan*)へと殺到し(*indahama*)、また小麦の購入に奔走した。マクリーズイーによれば、「問屋商人(*khazzan*)の心はそのことに貪欲となり」、ソラ豆一カダフ(*qadaḥ*)、九六分の一イルダツプ³⁹⁾が四銅貨デイルハム、つまり一イルダツプあたり三八四銅貨デイルハムという高値を記録した⁴⁰⁾。

マクリーズイーはこの物価騰貴の要因として、(1)ムフタスイブのアイニーが小売商たちの行動を放任し、

その後任のシシュマーニーが一転して彼らを脅し暴行を加えたこと、(2) 水牛と牛の大量死、(3) 強風によるナイル水運の途絶とカイロの河岸における穀物取引の中止、(4) ガザ、ラムラ、エルサレム、ナーブルス、シリア海岸地帯、ダマスクス、ハウラーン、ハマーなどシリア各地における物価高、すなわちエジプトのイルダッブ換算で一〇〇銅貨デイルハムという高値、(5) 穀物生産地の上エジプトにおける物価高とパン不足などを挙げている。さらにマクリーズイーは、小麦価格がイルダッブあたり二五〇銅貨デイルハムとなった際に百騎長アミールが「私は自分の小麦を三〇〇『銅貨』デイルハム以外では売らない」と発言したことを取り上げて、軍人支配層による投機的な穀物取引の問題点に読者の注意を喚起し、またスルターンが保有穀物の少なさから自己の穀倉から市場への穀物供給を禁じたことの影響についても指摘している。⁽⁴¹⁾その後、同年第三月半ば／一四二六年一月末以降、穀価は下降傾向を示した。⁽⁴²⁾第三月二日以降、期間や規模は不明であるが、スルターン・バルスバーイーが救貧事業として貧民 (*fugara*)⁽⁴³⁾ へのパンの分配を毎日実施し、これがある程度の効果を示した可能性もある。

次に史料で確認される食糧騒動は、八三六年第一二月二九日 (ミスラー月二三日) / 一四三三年八月一七日、ナイルの増水が遅れるなか、僅かな減水が記録された際のものである。この時、前月に一〇〇銅貨デイルハムであった小麦・イルダッブの価格が一四〇に上昇し、人々 (*nas*) は小麦の購入へと殺到し (*izdahana*)、小麦価格はさらに上昇した。⁽⁴⁴⁾他方、イブン・ハジャールの年代記には、「人々 (*nas*) が騒いだ (*dajja*)」とある。⁽⁴⁵⁾

八三九年第四月二四日 / 一四三五年一月一六日には、同月に入ってから物価の上昇を背景として、カイロの民衆による直訴、すなわち直截的な請願行動がみられた。この日、バルスバーイーが狩りに出ようと市内を騎行していると、民衆 (*amma*) が騒ぎ (*dajja*)、支配層の穀倉 (*shuwan*) に小麦が多量に存在するにもかかわらず、スークでパンが不足していることについて救済を求めた (*istaghathu*)。しかし、スルターンは「彼らの方に振向かなかった (*lam yaltaft ilay-hum*)」という。⁽⁴⁶⁾このように民衆によるスルターンへの対策要求は無視されたかにみえるが、他方、イブン・ハジャールは、民衆が騒いだ (*dajja*) ことを受けて、結局スルターンが穀倉を開いたと述べている。⁽⁴⁷⁾

以上のように、一四二五年一〇月の弾圧事件以降、表にまとめたとおり、夏季の増水期を中心に投機的取引が主因とみられる穀価の乱高下現象がしばしば起こっていたにもかかわらず、民衆運動の発生に関する史料記述は多いとはいえない。その背景として指摘すべきは、前述の弾圧事件において明示され、一四三五年一月の事例にも窺うことができる、スルターン・バルスバーイの統治の多分に非対話的な性格であろう。そしてそれは、首都のヒスバ行政を担う人物の選定とも連動していたようにみえる。イーナル・アツシシユマーニーは八三三年四月四日／一四二九年二月三十一日のアイニーのムフタスイブへの再任までムフタスイブの職にあり、その後、問題のアイニーの再任期が八三五年七月／一四三二年三月まで続いたが、こうしたヒスバ体制は、住民にとってみれば抗議行動を起こしにくい性格のものであったと推断されるのである。⁴⁸すなわち、十騎長アミールによる武力によるヒスバ行政に続き、抗議・要求行動が前代未聞の厳罰に帰結した事件の当事者であったアイニーが再任されたことによって、住民は直接行動を躊躇したに違いない。

ただし、一四三二年三月以降については若干の変化も

認められよう。この時期にカーヒラのムフタスイブを務めたのは、ムハンマド・ブン・ナスルッラーフ Salāh al-Dīn Muḥammad b. Badr al-Dīn Ḥasan b. Naṣr Allāh である。小ハージブ (ḥājib saghir)⁴⁹であったこの官僚名家出身者の就任をもって、市場行政は、民衆による物価高騰時における異議申し立てが比較的容易な体制へと移行したようにもみえるのである。そして、上述のように一四三五年に食糧問題をめぐるスルターンへの直訴がバルスバーイ統治期において初めて実行されたことは、まさにこうしたヒスバ体制の変化との関わりにおいて理解すべきものと思われる。

四 バルスバーイの物価政策と穀物市場への参入

以上のように、特にその治世前期を中心に、穀物問題をめぐって首都住民が異議申し立てを実行し難い体制を構築したバルスバーイであるが、食料の不足や価格上昇への対策が全く放棄されていたというわけではない。以下では、バルスバーイ政権による物価対策、及び物価に影響を与えたスルターンの穀物取引について検討し、当該時期の穀物市場に対するスルターン権力の態度につい

て考察することにした。

八三〇年第一一月下旬／一四二七年九月中頃、ナイル水位の減少を契機に穀物の買占め行動が広がりをみせ、市場供給量が不足した。この時、バルスバーイはムフタスイブのシシュマニーを通じ、小麦一イルダツプあたり一五〇銅貨デイルハム以上で売ること、そして個人が一〇イルダツプを超えて小麦を購入することを禁じた。

当時は物価上昇を期待する富裕者による買い溜めの傾向が顕著であり、「記すに値しない人物」が一〇〇〇イルダツプの小麦を買い込むといった有様であった。⁽⁵⁰⁾つまり、そこでのバルスバーイ政権の施策は、基本的にタスィール（価格の公定）、及び買占めの抑止を目的とする小麦購入量の上限設定であったといえよう。

八三一年第一一月／一四二八年八月以降、小麦、大麦、ソラ豆価格が上昇し、マクリースィーの表現によれば、「公益 (masalih) が見失われる状態」となった。そして同年第一二月／一四二八年九一〇月には、穀倉内に多く存在するにもかかわらず退蔵行為のため供給量が減少してしまい、小麦一イルダツプが四〇〇銅貨デイルハムに達したが、その後、小麦価格は少し下降し、三五〇銅貨デイルハムとなった。⁽⁵¹⁾イブン・ハジャールによれば、こ

の時、スルターンやその他の穀倉 (shuwan) が開かれたという。⁽⁵²⁾その意図に關しての説明は史料にないが、一連の展開からは、値崩れを察知したバルスバーイ、さらにおそらくはアミールたちが自らの保有する穀物を慌てて市場へと放出したものと推察される。これを物価安定のための廉価販売策とみなすことはできないと思われるのである。

八三二年第七月／一四二九年四・五月には、スルターン王室の商業部門であるマトジャル・スルターニー (matjar al-sultani) によって、大商人たち (tujjar) を対象とした数品目についての購入強制 (タルフ、*tarf*) が行なわれた。具体的な品目名は史料に記されていないが、スルターン権力による斯様な利益追求によって、小麦価格は一イルダツプあたり二二〇銅貨デイルハムから三〇〇へと上昇した。⁽⁵³⁾

スルターン権力による同様のタルフは、八三八年第二月／一四三四年九一〇月にも行なわれた。この時、バルスバーイはスルターンの穀倉 (shuwan) から一万イルダツプのソラ豆を取り出すと、「果樹・菜園 (basatin)、压榨所 (majsir)、その他の機械 (dawalih) の保有者」に対して一イルダツプあたり一七

五銅貨デイルハムで買い取りを強要した。当時のソラ豆価格は不明であるが、穀物は安価(rakḥā)であったという。こうしたスルターンの動きが被害を与えた事実が史料に記されていることからすれば、高値での購入強制であったことは明白である。⁵⁴さらに、マクリーズイーによれば、その翌月にも新任ワズイールのジャマール・アッディーン Jamāl al-Dīn Yūsuf b. Kaṭīb Jakan によって、ソラ豆一万八〇〇〇イルダップと小麦八〇〇〇イルダップのタルフが断行され、人々に被害を与えたという。⁵⁵以上のようなタルフは、胡椒や砂糖の専売制に代表されるスルターンによる商業活動への積極的参入と連動した経済行動であったといえよう。すなわち、それらはいずれも、大量の穀物を保有する王権の市場における利益の追求行為であり、これを首都の物価安定を目的とした施策とみなすことはできないのである。

そして、注意すべきは、このようなスルターン・バルスバーイの穀倉への小麦やソラ豆の貯蔵は、王領地の農民たちの税負担だけでなく、穀物市場における購入にもよっていたという点である。たとえば、八四〇年第六月／一四三六年一月・一四三七年一月、バルスバーイは貯蔵を目的として三万イルダップの穀物を購入するよう

指示を与えている。こうしたスルターン権力の動きは、明らかに救荒目的ではなく、拔群の財力を用いての穀物商業への積極的関与とみるべきであろう。マクリーズイーは、この時に民間で物価高騰を危惧して小麦、大麦、ソラ豆を購入する動きがあったことを伝えている。⁵⁶つまり、穀物貯蔵をめぐるバルスバーイの積極性は、王権による危機への備えとして都市社会全般に安心をもたらしものではなく、穀価高騰への危機感を煽る性質のものであったといえよう。斯様な局面におけるスルターン権力について、これをパターナリズム(父権的温情主義)の実践主体とみなすことはできない。むしろ、巨大な財力や政治権力の行使によって、穀物の取引ゲームで圧倒的に振舞うプレイヤーとしてのその姿を首都社会に向かつて明示していたといえるのではなからうか。

八三三年第三月／一四二九年一二月の事例では、スルターンが備蓄穀物を市場へ売却するに際して、ムフタスイブのシシュマーニーがフスタートとブラークの両河岸に穀物売りに来た穀物商人たちに対して一定期間売却を禁止する措置をとっている。この時、スルタンの備蓄小麦は一イルダップあたり三六〇銅貨デイルハムという高値で優先的に売却されており、その後、製粉

所への小麦供給量が充分になった後に、農村から小麦を持ち込む輸送商人のジャッラーブ商人たちは売却を許可されたのであった。かくして小麦不足が解消され、価格が下降したことを諸史料は伝える⁵⁷⁾。このような展開は、もしもスルターンの備蓄穀物が適正価格で市場に順調に供給され続けていたならば相場は安定していたのではないかとの推察を促す。本事例は、「国王大権」を行使する当該のスルタン権力が首都の穀物相場に圧倒的な影響力を及ぼし得る存在であったという実状を如実に示すものである。

八三九年第四月末／一四三五年十一月の物価高騰時には、前述のように民衆運動への対応として、バルスバーイがおそらくは自身の穀倉 (shuwan) を開き、そこから穀物を売るように命じている。そこでの売却価格・量については史料記述がなく、廉売策であったのかどうかは不明である。そして、イブン・ハジャルによれば、その後穀価の上昇がみられたが、市場供給量は増加したという⁵⁸⁾。

以上のように、物価対策の実施を明示する史料記事は、一四二七年九月のタスイルと一四三五年十一月の穀倉開放の二つの事例に限られている。そして、バルスバー

イが穀物の市場や相場に関与していた事実を伝えるその他の史料記述は、スルタン権力が活発な穀物取引に手を染め、強権を背景に利益追求を図っていたことを伝えている。バルスバーイによる穀物市場への積極的参入は、カーリミー商人の没落や移住を惹き起こした胡椒や砂糖の専売制のような徹底管理をめざす施策ではなかった。しかしながら、抜群の政治・経済力を誇るスルタンによる市場ゲームへの強引な割り込み行為であったという点に着目するならば、それらは基調において共通した傾向を持っていたとみなし得るのではないだろうか。

五 おわりに

一四二四年から一四二六年にかけて三次にわたって実行されたキプロス島への大規模な遠征軍の派遣は、キプロス王の捕縛とカイロへの連行に帰結したが⁵⁹⁾、それは、後期マムルーク朝の政治文化の諸側面にも少なからず影響を与えたとみるべきである。東地中海世界におけるヨーロッパ・キリスト教勢力の前線基地であった同島の政治・経済的従属を実現したこの目覚ましい「功績」によって、スルタン・バルスバーイは、バイバルス一世、カラーウーン、ハリールといったマムルーク朝初期の

「聖戦の英雄スルターン」にも連なり得るような統治者イメージを久方ぶりに民心に刷り込める立場を獲得したからである。⁽⁶⁾他方、バルスバーイは、首都の穀物取引に積極的に関わり、商業の多分野において利益追求に励みながら、その対外的な強硬姿勢を国内、とりわけ首都社会に向けても明示し、消費者たちの経済的不満を力で制圧することを厭わない新しいタイプのチェルケス系スルターンであった。本稿において論じてきた食糧騒動への対応に限っていえば、パターナリズムから離脱して抑圧へと進みがちであったこのような統治態度は、ムアイヤドをはじめ彼に先立つチェルケス・マムルーク朝スルターンたちとは明瞭に一線を画す性質のものであったとすることができよう。そして、別稿において既に詳論したように、このバルスバーイの東地中海における対外積極策を引き継ぎ、一四四〇年代にロドス島への派兵を繰り返したスルターンのジャクマク(在位一四三八―一五三年)は、民衆運動への対処法においてこの先達の強権的な政治姿勢を踏襲して行くこととなったのである。

註

(1) 拙稿「一四世紀末―一五世紀初頭カイロの食糧暴動」

『史学雑誌』九七卷一〇号(一九八八年)、一五〇頁。

(2) 拙稿「イスラーム都市の食糧騒動―マムルーク朝時代カイロの場合」『歴史学研究』六二二号(一九九〇年)二二―三〇、五三頁。

(3) 拙稿「尖塔の上のドゥアー・カイロの民衆蜂起・一七二四年一月」『イスラム世界』四二号(一九九三年)、四七―六三頁、拙稿「オスマン朝統治下カイロの食糧騒動と通貨騒動」『東洋史研究』五三卷二号(一九九四年)、一一四―一三三頁、拙稿「ミナレットにおける異議申し立て―前近代アラブ都市の諸事例に関する覚書」『史学』七二卷三・四号(二〇〇三年)、一一三―一二八頁。

(4) 拙稿「アドルと『神の価格』―スークのなかのマムルーク朝王権」三浦徹・岸本美緒・関本照夫編『比較史のアジア―所有・契約・市場・公正』東京大学出版会、二〇〇四年、二四五―二六三頁。

(5) 専売制の実施をはじめとしたバルスバーイの紅海・ビジャーズ・インド洋政策については、Ahmad Darag, *L'Égypte sous le règne de Barsbay, 825-841/1422-1438*, Damas: Institut français de Damas, 1961, pp. 159-237; Subhi Labib, *Handelsgeschichte Ägyptens im Spätmittelalter (1171-1517)*, Wiesbaden: Franz Steiner, 1965, pp. 377-387; Eliyahu Ashtor, *Levant Trade in the Later Middle Ages*, Princeton: Princeton University Press, 1983, pp. 284-303; John L. Meloy, "Imperial Strategy and Political Exigency: The Red Sea Spice Trade and the Mamluk Sultanate in the Fifteenth Century", *Journal of the*

American Oriental Society, 123 (2003), pp. 1-19 を参照の
こと。

- (9) Peter M. Holt, *The Age of the Crusades: The Near East from the Eleventh Century to 1517*, London & New York: Longman, p. 184.

- (7) フムルーク朝期カイロの食糧騒動に関する注目すべき研究に Boaz Shoshan, "Grain Riots and the Moral Economy: Cairo, 1350-1517", *Journal of Interdisciplinary History*, 10/3 (1980), pp. 459-478; Id., *Popular Culture in Medieval Cairo*, Cambridge: Cambridge University Press, 1993, pp. 52-66 があるが、これに対する筆者の見解については拙稿「一四世紀末―一五世紀初頭カイロの食糧暴動」一一頁及び拙稿「書評 ボアズ・シヤン著『中世カイロの民衆文化』」『イスラム世界』四十七号（一九九六年）七八―八七頁；Fuminiko Hasebe, "Popular Movements and Jaqmaq, the Less Paternalistic Sultan: Some Aspects of Conflict in the Egyptian Cities, 1449-52", *Annals of Japan Association for Middle East Studies*, 20/2 (2005), pp. 27-28 を参照された。

- (8) バルスバーイ期の物価変動表については既に Eliyahu Ashtor, *Histoire des prix et des salaires dans l'Orient medieval*, Paris: S.E.V.P.E.N., 1969, pp. 289-290, 305, 308 及び Boaz Shoshan, "Money Supply and Grain Prices in Fifteenth-Century Egypt", *The Economic History Review*, 36/1 (1983), pp. 47-67 があるが、パンや小麦粉の価格変動に注意を払うとともに年代記諸史料から明らかに

多くのデータを集めて本表を作成し直した。なお、表中の「購入強制」とは軍人によるタルフ (tarḥ) を指す。

- (9) 拙稿「一四世紀末―一五世紀初頭カイロの食糧暴動」六―八頁。

- (10) Al-Maqrīzī, *Kitāb al-Sulūk li-ma'rifaṭ dawlat al-mulūk*, 4 vols., Cairo: Dār al-Kutub al-Miṣriyya, 1943-72, vol. 4, p. 920 及び拙稿「一四世紀末―一五世紀初頭カイロの食糧暴動」一一頁。

- (11) Al-Maqrīzī, *al-Sulūk*, vol. 4, pp. 625, 628, 630-31, 634, 636-37; Ibn Ḥajar al-ʿAsqalānī, *Inḥā al-ghunn bi-daw' al-ʿunn*, 4 vols., Cairo: Lajnat Iḥyā' al-Turāth al-Islāmī, 1969-98, vol. 3, p. 301; al-Aynī, *ʿIqd al-jumʿan fi tarīkh ahl al-zamān*, ʿAbd al-Rāziq al-Ṭanṭāwī al-Qarmūṭ (ed.), Cairo: al-Zahrā' li'l-Ṭīām al-ʿArabī, 1989, pp. 197-198.

- (12) Al-Maqrīzī, *al-Sulūk*, vol. 4, p. 660. 銅貨「ヤルハム」の記述は Boaz Shoshan, "From Silver to Copper: Monetary Changes in Fifteenth-Century Egypt", *Studia Islamica*, 56 (1982), pp. 97-116 を参照のこと。

- (13) Al-Maqrīzī, *al-Sulūk*, vol. 4, p. 668; Ibn Ḥajar, *Inḥā al-ghunn*, vol. 3, p. 329, 424. ヤルハムの年代記には「スレー月十三日」である (al-Aynī, *ʿIqd al-jumʿan*, p. 238)。

- (14) Al-Aynī, *ʿIqd al-jumʿan*, p. 238.

- (15) カイロの川の両岸「フムルークとフンスタートにある穀物河岸 (saḥl al-ghalla)」の記述は Ira M. Lapidus, "The Grain Economy of Mamluk Egypt", *Journal of the Economic and Social History of the Orient*, 12

(1969), pp. 1-15. Nelly Hanna, *An Urban History of Baghdad in the Mamluk and Ottoman Periods*, Cairo: Institut français d'archéologie orientale, 1983, pp. 42-43 及び拙稿「一四世紀末—一五世紀初頭カイロの食糧暴動」三八頁を参照された。

- (16) Al-Maqrīzī, *al-Sulūk*, vol. 4, p. 669.
- (17) Ibn Ḥajar, *Inbā' al-ghunn*, vol. 3, p. 329; al-'Aynī, *Ṭiqd al-jumān*, p. 238.
- (18) Al-Maqrīzī, *al-Sulūk*, vol. 4, p. 678.
- (19) Al-Maqrīzī, *al-Sulūk*, vol. 4, p. 687. マクリーズィに於ける「ダマスカスにおいて」の頃穀価が上昇したと云ふ。
- (20) Ibn Ḥajar, *Inbā' al-ghunn*, vol. 3, p. 351. Al-Maqrīzī, *al-Sulūk*, vol. 4, p. 691 には「一ディーナールとある」。
- (21) Al-Maqrīzī, *al-Sulūk*, vol. 4, p. 691.
- (22) Al-Maqrīzī, *al-Sulūk*, vol. 4, pp. 693-94; al-'Aynī, *Ṭiqd al-jumān*, p. 288.
- (23) Al-Maqrīzī, *al-Sulūk*, vol. 4, p. 697; Ibn Ḥajar, *Inbā' al-ghunn*, vol. 3, p. 348.
- (24) Al-'Aynī, *Ṭiqd al-jumān*, pp. 252-53.
- (25) Al-Maqrīzī, *al-Sulūk*, vol. 4, p. 699.
- (26) Ibn Ḥajar, *Inbā' al-ghunn*, vol. 3, p. 350.
- (27) Al-Maqrīzī, *al-Sulūk*, vol. 4, p. 698.
- (28) マムルーク朝期のエジプト社会におけるシャリーフの実態に関しては未解明の部分も少なくないが、バルスバィイ期には、例えば「八三三年第六月／一四三〇年二

三月、ベストの流行拡大に際して、ムハンマドという名のシャリーフ四〇人がアズハル・モスクに集められ、手当支給の後、集団でのクルアーン朗誦とベスト退散の祈願(ドウアー)の儀式が執り行われた。これはスルタンの命により、当時文書庁長官であったシャリーフのイブン・アドナン Shihab al-Dīn Ahmad b. 'Adnān によって主催され、東方地域 (biād al-mashriq) の方法を踏襲したものであったとされる (Al-Maqrīzī, *al-Sulūk*, vol. 4, pp. 828-829; Ibn Ḥajar, *Inbā' al-ghunn*, vol. 3, p. 438)。

- (29) 拙稿「一四世紀末—一五世紀初頭カイロの食糧暴動」一七—二五頁及び拙稿「イスラーム都市の食糧騒動」二四—二六頁。
- (30) バルスバィイとアイニの親密な関係については、人名表記などに少々難のある論考ではあるが、Anne F. Broadbridge, "Academic Rivalry and the Patronage System in Fifteenth-Century Egypt: al-'Aynī, al-Maqrīzī, and Ibn Ḥajar al-'Asqalānī", *Mamluk Studies Review*, 3 (1999), pp. 95-97 を参照のこと。
- (31) Ibn Ḥajar, *Inbā' al-ghunn*, vol. 3, p. 364. 他方、アイニは「カーヒラとミスルのムフタスイフからの解任をヒジュラ暦八二九年第二月半はのこととしている (al-'Aynī, *Ṭiqd al-jumān*, p. 294)」。バルスバィイ期カイロのヒスバ職保持者たちについては、菊池忠純「マムルーク朝時代カイロのムフタシブー出身階層と経歴を中心に」『東洋学報』64/1・2 (1983), pp. 146-147 を参照のこと。

(32) Al-Maqrizī, *al-Sulūk*, vol. 4, p. 717; al-ʿAynī, *ʿIqd al-jumʿan*, p. 297.

(33) 更なる検討を要するが、信頼を置く側近を突如重職に拔擢する手法は、バルスバーイの治世に特徴的であったようにみえる。その最たる例が、側近の「王の道化 (muḍrik)」であったイブン・カーシム Wāliyy al-Dīn Muḥammad b. Qasīm al-Mahallī のヒジャーズ両聖地の重要管理職への任命である。詳しくは、拙稿「マムルーク朝期メディーナにおける王権・宦官・ムジャーウィル」今谷明編『王権と都市』思文閣出版、二〇〇八年、二二五―二二七頁を参照された。

(34) 以下 Ibn Taḡhrī Birdī, *al-Nuḡm al-zāhira fī mulūk Miṣr wa-l-Qāhira*, 16 vols., Cairo: Maṭbaʿat Dār al-Kutub al-Miṣriyya & al-Muʾassasa al-Miṣriyya al-ʿĀmma, 1929-72, vol. 14, pp. 281-82. イブン・タグリー・ビルデーの引用記事が『道程』の記事と異なるのは、事件の開始を金曜日であると明記している点と「通行人から細路の入口を奪った」という部分で「通行人から」が削除されている点である。

(35) マクリースイーとアイニーの対立的関係については、Broadbridge, "Academic Rivalry and the Patronage System", pp. 85-107 を参照のこと。セッベハ、マクリースイーのアイニーに対する見方を検証する部分でこの事件記事が取り上げられている。

(36) アイニーとイブン・タグリー・ビルデーの師弟関係については、とりあえず Muḥammad Muṣṭafā Ziyāda, *al-*

Muʾarrikhūn fī Miṣr fī al-qarn al-khāmis ʿashar al-miʾadi, Cairo: Maṭbaʿat Lajnat al-Taʿlīf wa-l-Tarjama wa-l-Nashr, pp. 29-30; Sami G. Massoud, *The Chronicle and Annalistic Sources of the Early Mamluk Circassian Period*, Leiden: E. J. Brill, 2007, p. 62 を参照のこと。

(37) 拙稿「一四世紀末―一五世紀初頭カイロの食糧騒動」二六頁、長谷部「イスラーム都市の食糧騒動」二四―二五頁、Hasebe, "Popular Movements and Jaḡnaq", pp. 46-47 note 22.

(38) アイニーの年代記におけるヒジュラ暦八二八年の記事には、自らがムフタスィブ職にあったこと、第二月二二日及び二九日の出来事について述べられているにもかかわらず、騒動や処罰に関する言及は見当たらない (al-ʿAynī, *ʿIqd al-jumʿan*, pp. 245-288)。アイニーの年代記の史料性格については、Nobutaka Nakamachi, "Al-ʿAynī's Chronicles as a Source for the Bahri Mamluk Period", *Orient*, 40 (2005), pp. 140-171 を参照のこと。なお、バルスバーイ期についてアイニーの年代記に依拠する傾向の強いイブン・アッ＝サイラフィーも、同年に関して詳述しつつも本事件について何も伝えていない。Ibn al-Ṣayrafi al-Jawhārī, *Nuḡhat al-nuḡs wa-l-ʿabḍān fī taʾwārīḥ al-zamān*, 4 vols., Cairo: al-Hayʾa al-Miṣriyya al-ʿĀmma li-l-Kitāb, 1970-1994, vol. 3 を参照のこと。

(39) Al-Maqrizī, *al-Sulūk*, vol. 4, pp. 709-710. セッベハ、食肉不足について、スルターンのマムルークの消費用に毎日二万二〇〇〇ラトルが必要であったことが述べられ、

宮廷の食肉需要の大きさが指摘されている。

- (40) Al-Maqrizī, *al-Sulūk*, vol. 4, p. 710.
- (41) Al-Maqrizī, *al-Sulūk*, vol. 4, pp. 710-11.
- (42) Al-Maqrizī, *al-Sulūk*, vol. 4, p. 715.
- (43) Al-Maqrizī, *al-Sulūk*, vol. 4, p. 712. 食糧危機に際してのスルターンによるパンの配給については、拙稿「一四世紀末―一五世紀初頭カイロの食糧暴動」、二六―二九頁を参照されたい。バルスバリーによるワクフ設定以外の救貧事業としては二例が確認されるが、いずれも物価高騰時の活動ではない。一つは、病床にあったバルスバリーが八三七年六月／一四三四年一二月に善行として貧民への財の分配を行なった例であり、もう一つは、八四一年第一〇月／一四三八年三―四月のペスト流行時の貧民への喜捨の事例である (al-Maqrizī, *al-Sulūk*, vol. 4, pp. 910, 1037)。後者に際しては、貧民の殺到で混乱が生じ、これに怒ったバルスバリーは、ハラーフイーシュの長 (sulṭān al-ḥarāfiṣh) や「諸集団の長 (shaykh al-tawāif)」を呼び付けると訓告し、浮浪者たち (ju'aydiyya) による路上の物乞いを禁止した。これに対して、市中ではスルターンへの神罰を求める祈願が行なわれた。マクリーズイーは、この神罰祈願とスルターンが死の床についたこととの間の因果関係を示唆する。
- (44) Al-Maqrizī, *al-Sulūk*, vol. 4, p. 894. この記述に依拠したとみられるイブン・アッ＝サイラフィーは「人々は小麦の購入に急いだ」と言い換えている。Ibn al-Ṣayrafī, *Nuḥd al-nufus*, vol. 3, p. 263 を参照のこと。
- (45) Ibn Ḥajar, *Inbā' al-ghunn*, vol. 3, p. 499.
- (46) Al-Maqrizī, *al-Sulūk*, vol. 4, p. 964. Ibn al-Ṣayrafī, *Nuḥd al-nufus*, vol. 3, p. 338 に於て「民衆 (awāmm) が彼 (スルターン) に抗議した (waḡata)」と言ひ換えられ、「彼 (スルターン) は彼らに注意を払わず、振り向かなかつた」と記され、少し詳しい説明になつてゐる。
- (47) Ibn Ḥajar, *Inbā' al-ghunn*, vol. 4, pp. 10, 12.
- (48) Al-Maqrizī, *al-Sulūk*, vol. 4, pp. 820, 867. Ibn Ḥajar, *Inbā' al-ghunn*, vol. 3, pp. 436, 476. アイニーの記事 (al-Aynī, *Iqd al-jumūn*, p. 373) によれば、アイニーの再任に際し前任者のイーナールは上エジプトにスルターンが保有する村々の土地調査 (misāḥa) に赴いたと云ふ。
- (49) Al-Maqrizī, *al-Sulūk*, vol. 4, p. 867; al-Aynī, *Iqd al-jumūn*, p. 418. イブン・ナスルニーンに於ては Bernadette Martel-Thoumin, *Les civils et l'administration dans l'état militaire mamluḥ (IXe/XVe siècle)*, Damas: Institut français de Damas, 1991, pp. 212-225 を参照のこと。彼は八四〇年第一二月／一四三七年六月に文書庁長官 (nāẓir al-ḥakās) の重職を兼務するようになった (al-Maqrizī, *al-Sulūk*, vol. 4, pp. 1011-1012)。
- (50) Al-Maqrizī, *al-Sulūk*, vol. 4, pp. 750-51.
- (51) Al-Maqrizī, *al-Sulūk*, vol. 4, pp. 782-783; al-Aynī, *Iqd al-jumūn*, p. 328.
- (52) Ibn Ḥajar, *Inbā' al-ghunn*, vol. 3, p. 405.
- (53) Al-Maqrizī, *al-Sulūk*, vol. 4, p. 801.
- (54) Al-Maqrizī, *al-Sulūk*, vol. 4, p. 933. イブン・アッ＝サ

イラフィーの記事によれば、当時のソラ豆価格は一五〇銅貨ディルハムであったと云う。Ibn al-Sayrafī, *Nuzhat al-mufīs*, vol. 3, p. 306 を参照のこと。

- (55) Al-Maqrizī, *al-Sulūk*, vol. 4, p. 934. 官僚名家のカーティブ・ジャカム家について、Martel-Thoumian, *Les citis et l'administration*, pp. 283-294 を参照のこと。

- (56) Al-Maqrizī, *al-Sulūk*, vol. 4, p. 1004. スルターンによる穀物の買い付けは、穀価の低かった八三五年第一〇月／一四三二年六月にも実施されたが、その際にはエジプトの諸地方 (amāl Mīṣr) における買い付けを命じた上で、自らが十分に穀物を確保できるように、フスタートとブーラークの河岸で活動する穀物仲買人 (sanāṣirat al-ghalla) に対して一時売却の停止を命じる措置が取られたこと。Al-Maqrizī, *al-Sulūk*, vol. 4, p. 872 を参照のこと。
- (57) Al-Maqrizī, *al-Sulūk*, vol. 4, p. 820. Ibn Ḥajar, *Inbāʾ al-ghumr*, vol. 3, p. 436.

- (58) Ibn Ḥajar, *Inbāʾ al-ghumr*, vol. 4, p. 12.

- (59) Al-Maqrizī, *al-Sulūk*, vol. 4, pp. 721-726.

- (60) レムルーク朝初期の聖戦の英雄王イメーンについて、ハイバルス一世に関する Peter M. Holt, "The Virtuous Ruler in Thirteenth-Century Mamluk Royal Biographies", *Nottingham Medieval Studies* 24 (1980), pp. 27-35 を参照のこと。

- (61) Hasebe, "Popular Movements and Jaqmaq", pp. 44-45.

表 バルヌーイ期カイロの物価変動

ヒシエラ暦年月日	西暦年月日	小麦価格 (lirdabb)	ソラ豆価格 (lirdabb)	大麦価格 (lirdabb)	小麦粉価格 (lirdaia)	パセリ価格 (lirai)	典拠
825 年 825 年第 9 月 826 年第 2 月	1421年12月-1422年12月 1422年8-9月 1423年1-2月	250d.f 150d.f 60→90d.f	70or80d.f 80d.f 75or70d.f	70or80d.f 85d.f 65or60d.f	35d.f	2→1.5d.fに公定	<i>ʿIqd</i> 165 <i>Sutak</i> vol. 618 <i>ʿIqd</i> 197 <i>Sutak</i> vol. 4, 630 <i>hbaʿ</i> vol.3, 301 <i>Sutak</i> vol.4, 634
第 2 月 第 4 月 20 日 第 5 月 1423年4-5月 1423年5-6月 第 6 月 第 10・11 月 第 11 月	1423年1-2月 1423年4月2日 1423年4-5月 1423年5-6月 1423年9-11月 1423年10-11月 1423年12月-1424年12月	60d.f 80d.f 100→120d.f 120→150d.f 140d.f	70d.f 70d.f 70d.f	70→100d.f 60d.f 70d.f	13d.f		<i>Sutak</i> vol.4, 636 <i>ʿIqd</i> 197-98 <i>ʿIqd</i> 237 <i>Sutak</i> vol.4, 646 <i>ʿIqd</i> 237 <i>Sutak</i> vol.4, 660 <i>hbaʿ</i> vol.3, 328 <i>Sutak</i> vol.4, 672
827 年 827 年初頭 第 4 月 第 10 月 第 11 月 年末	1423年3月 1424年8-9月 1424年9-10月 1424年11月 1424年11月 1425年5-6月	140→200d.f 70d.fの上昇 180d.f 200d.f	80d.f 110d.f 90→150d.f	85d.f 110d.f	1d.f (10or9dgyaで)		<i>ʿIqd</i> 237 <i>Sutak</i> vol.4, 678 <i>Sutak</i> vol.4, 687 <i>Sutak</i> vol.4, 691 <i>hbaʿ</i> vol.3, 351 <i>Sutak</i> vol.4, 697 <i>hbaʿ</i> vol.3, 351 <i>Sutak</i> vol.4, 697 <i>ʿIqd</i> 252-53 <i>hbaʿ</i> vol.3, 364 <i>Sutak</i> vol.4, 710 <i>Sutak</i> vol.4, 711 <i>Sutak</i> vol.4, 712 <i>Sutak</i> vol.4, 715 <i>Sutak</i> vol.4, 718 <i>hbaʿ</i> vol.3, 364 <i>Sutak</i> vol.4, 734 <i>Sutak</i> vol.4, 744 <i>Sutak</i> vol.4, 750
828 年初頭 第 7 月 第 8 月 第 11 月 第 11 月 第 11 月末 第 11・12 月	1425年6-7月 1425年6-7月 1425年9-10月 1425年9-10月 1425年10月半ば 1425年9-11月 1425年11月23日	150→200d.f以上 200d.f 300→250d.f	1dinar 200d.f以上 300d.f	150d.f 150d.f		1d.f 1.5d.f	<i>hbaʿ</i> vol.3, 364 <i>Sutak</i> vol.4, 710 <i>Sutak</i> vol.4, 711 <i>Sutak</i> vol.4, 712 <i>Sutak</i> vol.4, 715 <i>Sutak</i> vol.4, 718 <i>hbaʿ</i> vol.3, 364 <i>Sutak</i> vol.4, 734 <i>Sutak</i> vol.4, 744 <i>Sutak</i> vol.4, 750
829 年第 1 月 11 日 第 2 月半ば 第 2 月 29 日 第 3 月 1 日 第 3 月半ば 第 5 月 第 5 月 第 7 月 第 11 月下旬	1425年11月11日 1425年12月未 1425年1月10日 1425年1月11日 1425年1月末 1426年3-4月 1426年11月初頭 1427年4-5月 1427年9月後半 1427年10月下旬	250d.f(その後100d.fに) 300d.f以上 300d.f 2→1dinar 100→200d.f 150d.f以下 110→80d.f 200d.f→150d.fに公定 170d.f以下	300d.f 300d.f 384d.f 400→300d.f 150d.f 150d.f 130d.f以下	280d.f 300d.f 1dinar Ashrafi 100d.f以下 150d.f	120d.f 150→80d.f 1/2d.f		<i>Sutak</i> vol.4, 764; <i>ʿIqd</i> 340

第2月 第2月 第6月 第7月 第9月 第11月 第12月	1427年11-12月 1428年3-4月 1428年4-5月 1428年4-5月 1428年6-7月 1428年8-9月 1428年9-10月	140d.f 140d.f 140d.f以下 140→160d.f 100→160d.f 260d.f 300d.f以上 400→350d.f以下 400→450→500d.f 450→500d.f	70d.f 90d.f 90d.f 160d.f 100→160d.f 200d.f以上 260d.f 300d.f 180→300d.f 180→300d.f	70d.f 90d.f 90→125d.f 90→125d.f 200d.f以上 230d.f 300d.f 180→300d.f 180→300d.f 130d.f 140d.f 140d.f	130d.f 140d.f 80d.f 150→90d.f	<i>Sutuh</i> vol.4, 766 <i>ʾiqd</i> , 328 <i>Sutuh</i> vol.4, 776 <i>Sutuh</i> vol.4, 778 <i>ʾiqd</i> , 340 <i>Sutuh</i> vol.4, 782, <i>ʾiqd</i> , 328, 340 <i>Sutuh</i> vol.4, 782, <i>ʾiqd</i> , 328 <i>Sutuh</i> vol.4, 783, <i>ʾiqd</i> , 328 <i>Sutuh</i> vol.4, 794 <i>ʾiqd</i> , 353 <i>Sutuh</i> vol.4, 799 <i>Sutuh</i> vol.4, 800, <i>ʾiqd</i> , 354 <i>Sutuh</i> vol.4, 801 <i>Sutuh</i> vol.4, 804 <i>Sutuh</i> vol.4, 810 <i>Sutuh</i> vol.4, 820 <i>Sutuh</i> vol.4, 820
833年 第3月 第4月 第7月 第8月	1429年11-12月 1429年12月-1430年1月 1430年3-4月 1430年4-5月	360d.f で購入強制 250d.f 200d.f以下 150d.f以下 170d.f以下	70d.f以下 150d.f以下 170d.f以下 140d.f以下	110d.f 90d.f 90d.f以下 60d.f	80d.f以下	<i>Sutuh</i> vol.4, 830, <i>ʾiqd</i> , 379 <i>Sutuh</i> vol.4, 832, <i>ʾiqd</i> , 379 <i>Sutuh</i> vol.4, 850 <i>Sutuh</i> vol.4, 851 <i>Sutuh</i> vol.4, 872 <i>ḥbz</i> vol.3, 501 <i>ʾiqd</i> , 435-36 <i>Sutuh</i> vol.4, 880 <i>Sutuh</i> vol.4, 893 <i>Sutuh</i> vol.4, 894 <i>Sutuh</i> vol.4, 902 <i>Sutuh</i> vol.4, 904 <i>Sutuh</i> vol.4, 919 <i>Sutuh</i> vol.4, 920 <i>Sutuh</i> vol.4, 933 <i>Sutuh</i> vol.4, 964, <i>ʾiqd</i> , 467
834年 第1月 第2月	1430年9-10月 1430年10-11月 1432年6月	130d.f 130d.f 130d.f以下 2/3dinar	180→185d.f 80d.f以下 60→80→90d.f	170→180→140d.f 80d.f以下 60→80→90d.f	140d.f	
836年 第11月 第12月末	1432年8月末 1433年6-7月 1433年8月半ば 1433年8月後半 1433年9月半ば 1434年5-6月	130d.f以下 100→130d.f 140→150d.f 140d.f 180d.f 150d.f以下→170d.f 200d.f	200d.f 175d.fで購入強制 210d.f	170d.f	2d.f	
837年初 第2月初頭 第10月 第12月初頭	1434年7月初旬 1434年9-10月 1435年10-11月	360d.f				

d.f. : dirham min aktulūs
Sutuh Al-Maqrizī, al-*Sutuh*
ḥbz ʿ Ibn Ḥajar, *Ḥbz* al-*ghumr*
ʾiqd, Al-Aynī, *ʾiqd al-jumʿa*